

史遊会通信

NO. 195
平成23年
2月12日
発行

事務局
03-3712
0651
下山田方

一月講演

杜甫の詩風とその変化について

中込勝則

1、杜甫の詩風の第一に挙げられるのは、唐室への崇慕である。これはその系譜よりして母方の先祖を遡れば唐の高祖李淵並びに太宗李世民に、父方の遠祖は、昔、晋朝成立に功あつた当陽君杜預に行き着くことに発する。若い頃から己の才能を自負し、いずれは科擧に登第して「立ろに要路の津に登り、君をして堯舜の上に致し、再び風俗をして淳なら使めん」との思いは強く、安史の乱によつて唐室が危殆に瀕してからのみならず、乱の後、左拾遺の官に登用された一時期は勿論、晩年秦州へ、さらに蜀へ流れていった後、もはや自らがその要路に立つ望みがないことを否応なく自覚せざるを得なくなつても尚、唐室の榮衰は終生、

頭から離れることはなかった。

2、第二は、彼にとつて「詩はわが家のこと」であつた。祖父の杜審言は、則天武后時代に沈佺期・宋之問と並んで律詩の形式の完成に功があり、「文章四友」といわれた。杜甫はその孫であるという意識は強く、「語、人をして驚かせずんば、死すとも休まず」との強烈な詩に対する自負と研鑽は、一生、彼をして休ませることなく作詩に駆り立て、晩年、如何に貧困窮弊の中にあつても、それが又、彼の事物に対する凝視の目を養い多くの佳詩を残させる原動力となつた。

このことは、わが国においても、藤原定家が保元・平治の乱に際して「歌はわが家

例会のお知らせ

◎ 2月例会

日時 平成23年2月23日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 島津隆子氏

テーマ 信長の女性観について

自由執筆 小田敏一郎・村上邦治

隆恵の諸氏

締切 2月末日

字数 最長本文19字107行

◎ 3月例会

日時 平成23年3月23日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 太田精一氏

テーマ 未定

自由執筆 鯨游海・柴田弘武

中込勝則の諸氏

締切 3月末日

のこと、紅旗征戎何事かあらん」として、わが家は世の中のことには乱されることなく歌の道に専心するのがつとめであると言ったことと共通するが、ただ、違ふのは、杜甫は世の動きから目をそらすことなく、常に唐室の栄えを念願し、又、後に述べるように、兵乱の中で苦しむ人民や弱者への愛情を抱き続けたことにある。

3、では人民や弱者への愛情はどこから来たものであろうか。

それは、彼が故郷河南省鞏県の「窰洞」で過ごした少年時代にある。そこは黄上平原の真つ只中であつて、何事もなければ世の中の動きとは無関係な純朴な農民達が、平和に暮らす中国のどこにもある農村地帯。丘を横に掘った洞窟の家「窰洞」で純朴な農民たちが今でも暮らしている。

やがて、玄宗の外征をたくましくする為政の中で、農民たちは戦争に駆り出され、耕作手の無くなった農地は荒れ、そのうち安史の乱が起つて事態はますます悪化し、兵乱で死傷する者数知れず、生きている者は過酷な徴兵と徴税で苦しむ。こうした事態は庶民達をして各々その生業にいそしませ、「再び風俗をして淳なら使めん」をわ

が願いとす杜甫にとつて耐えられるものではなかつた。こうした悲惨な有様を彼らに成り代わつて詠つた「三吏三別」をはじめ多くの詩がつくられた。士族の子弟として徴兵や徴税から免れていた杜甫自身として飢饉による米價高騰などによつて生活は苦しく、遂に官を棄てて、縁故を頼つて秦州から蜀へと飄泊せざるを得なくなる。その中で彼の詩魂はますます研ぎ澄まされていった。

4、苦しい中にあつても彼の家族への愛情は薄れることがない。生活のため家族を長安から120里離れた奉先県、さらに乱を避けるために鄜州に疎開させるが、脳裏から家族のことが離れたことがなく、その安否を気遣う詩がたくさんある。暇をもらつて家族を訪れるが、一番下の子は、食物がないため餓死している。家族はぼろぼろの着物だ。世事に疎く、うまく立ち回れないことを半ば自嘲気味に詠うのである。

5、そしていつも彼の心にあつたのは、かつて交わりを結んだ詩友たちや、心を許せる友人達への思いである。中でも若い頃洛陽時代に知り合つた李白とは、ひとたび別れたきり会うことはなかつたが、生涯、

彼のことを思い続け、のち蜀に移つた後も彼を思つて作つた詩は多い。また、高適・嚴武は蜀に來任して何くれとなく杜甫の支援をしてくれたから、これらを詠つた詩も数多く残されている。彼が尊敬する鄭度や王維は、安録山の賊軍に無理やり偽官に就くことを強制された嫌で、乱の収束後、罰を受けるが、彼らを悼んだ詩も多い。

6、次に彼の詩風の変化について見ると、以上の五点については、終生それを詠い続けたが、彼の詩にはそれ以外に「神仙思想への憧れ」があつた。これは若い頃李白・高適たちと山東・河南などを旅し、飛揚跋扈した壯遊時代に彼らの影響を受けた為であるが、そもそも中国の文人達には昔から俗世間から隔たつて自由な精神の下に生きたいとの「竹林の七賢」・陶淵明などに代表される道教的思想が根強くある。

杜甫の壯遊時代の詩にはそれが色濃く現れているが、彼が長安に上つて官吏の道を目指し己の経綸を發揮したいとした以降は、科擧に下第しつつも何とかして官の道に進みたいと高位高官たちに詩を贈つて、仕官を頼んだ長安十年の時代には、現実の生活の前に「神仙思想への憧れ」などは影を潜

める。

7、そして、安録山の乱の中で新皇帝肅宗の安在所に駆けつけた功で位は下ながらやと左拾遺の官を授けられるが、飢饉の影響もあつて生活は苦しく、自分をはがゆく思うものの、出世からは遠くなるばかり戦乱の中で苦しむ人民をみて、彼らへの同情は政治への批判となつて、3、にいう杜甫独特の「反戦・社会派的な詩」が数かぎりなく多くなつていく。

8、そして、世の中の動きから目が離れることはなくその動きを克明に詠い、併せて自己の生活を詠い彼の詩が「史詩・自分史」と呼ばれるようになっていく。彼の詩を作年代順に読めば動乱時代がよく分かり、併せて杜甫がその中でどう生き、その時々彼の心の内が覗き込むようによく分かるのである。

9、念願の官途についたものの、彼がつて弁護し、肅宗の怒りを買った房琯が陝西省邠州刺史に左遷されたのに伴つて、彼もまたその一派と看做されて華州司功参军（雑務担当）に左遷された。その職務は下級官吏で雑事に追われ、生活は苦しく、遂に官を辞し、甥を頼つて家族を引き連れて、

甘肅省秦州に流れて行つた。

しかし、そこも辺境の地で、住みずらくさらに南の同谷へ、さらに成都へと飄泊する。この旅は、蜀の棧道を越え、険しい山道を越える苦難なものでその苦勞を同谷紀行・成都紀行などの詩に残した。これらの詩は苦難さを詠うことが先立つものの、道々見た人民の苦難を詠うことを忘れては居ない。

10、成都に辿りついて、郊外に草堂を建てて住むが、蜀（四川省）は、昔から「天府の地」と呼ばれ、気候温暖で物産は豊富。ここでの生活はまずまず安定し、それを反映して詩風は温和なものに変わる。生活を楽しみ家族との団欒などを詠った詩も多い。やがて、若い頃の詩友である高適や、後輩の嚴武が蜀の刺史として赴任してきて彼らの援助も受けられるようになって彼らと詩を交換し、それを楽しむゆとりもできた。そして一時、嚴武の努力で嚴武幕下の参謀に取り立てられた。

ところが、彼の生き方下手・世渡り下手は相変わらずで次第に、宮仕えが息苦しくなつて行く。そして、年取つた上、病氣勝ちであることから次第に都の長安や故郷の

洛陽に帰りたいたいの思いが強くなり、高適や嚴武が相次いで死去したことから蜀に居続ける理由も薄れ、官を辞して長江を下り、都に帰ろうとする。

11、「望郷の念」は、秦州に流れたときからずっと詠い続けてきてはいたが、既に五十歳を越え病気がちな身となつて、官途についてわが経綸をふるうことなど見果てぬ夢となつていることは彼自身がよく分かつていた。しかし、安史の乱終結後も、唐朝の国威の低下を侮つた異民族の侵入や国内の叛乱等が各地に起こつて戦乱は全国的に収まらず、彼の頭の中から、唐朝が「貞観・開元の治」のような全盛の時代を再び取り戻し、萬民をして太平を謳歌できる政治をして欲しいとの思いは強く残つていて、望郷を思ふと戦乱は彼の帰郷の妨げともなつていたので、政治の安定・人民の安樂の望みと望郷とわが身の老衰・多病の嘆きは、この頃の詩の主要なモチーフになっている。

12、そして長江を下り、江陵・洞庭湖などを経て生活のため縁故を頼つて、長沙の南まで足を伸ばすが、遂に道は窮まり長沙と岳陽との間で船の中で一生を終えた。

自由執筆

捜す

佐藤 健一

京都嵯峨に、百人一首でも知られる小倉山があるが、その小倉山の東の麓に、二尊院がある。釈迦如来と阿弥陀如来を祀る寺である。ここは二条家や三条家などの菩提寺で、いくつもの重要文化財、重要美術品がある。

二条家の墓と三条家の墓の間に角倉家の墓がある。

江戸時代に河川の諸工事に活躍し、河川大名の異名を持つ角倉了以は、京の東及び西を流れる加茂川・保津川の工事を完成して流通や防災に貢献したことで知られる。この一族は医を本業とする吉田家であるが、同時に上倉すなわち金融業でもあった。了以の父は宗柱といい、天竜寺の僧と共に明に渡り、明では診察の素晴らしさにより意庵と呼ばれた。また明国皇帝に薬を調合している。医は了以の弟宗恂が受け継ぐ。

了以は上倉と河川、安南国への貿易が主たる仕事である。了以の子は素庵といい、

嵯峨本などでも知られる文化人であるが、父の仕事を引き継いだ。素庵の子玄紀と蔵昭にそれぞれ分割して譲っている。

二尊院は角倉家の菩提寺である。この寺の本堂はこれも京都市指定文化財であるが、ここから新しく角倉甫庵の坐像が見つかった。甫庵とは素庵の子玄紀である。了以については坐像も立像もある。その子の素庵も坐像はある。甫庵の像の背に「延宝六年甫庵像八十五歳 七月二十四日吉日」とあり、甫庵は天和元年に没しているので、生前に作ったものである。なを、了以の父宗柱の弟に吉田光茂がおり、その曾孫が吉田光由（久庵）である。

昭和二十七年大分県の香々地町文化調査委員会は香々地に残る不思議な墓について調査をした。墓石は上部が尖った板碑のよくな形で前面は削り取られて書いてあることがわからない。土地の人たちの伝承によれば、この墓は京都の数学者吉田光由の墓ということであった。調査委員会では「伝吉田光由の墓」として扱うことにした。まもなく、隈井家から吉田光由の位牌が香々地の公民館に寄贈された。吉田光由が香々地で教えていたとき世話をした隈井吉定の

子孫らしい。位牌には寛文十二年十一月廿一日 顕機圓哲居士とある。このことから、この地で吉田光由はなくなった、あるいは墓の前面が削られているのは、吉田光由はキリシタンだからだ、などとさまざまなきと書かれた。著名な和算研究家の平山諦氏も晩年では「吉田光由の墓がないのはキリシタンだったからだ」「毛利重能も墓がないからキリシタンだ」といふ文を書き、他の研究者から猛反対を受けた。

吉田光由が九州で亡くなったはずがないし、自分の子も僧であることから、考えられないのだが、光由が十歳位の時代に数学者といってもよい宣教師のスピノラが京都にいたことが、キリシタン説につながった。大分の墓は、香々地に残って塾を開いていた吉田光由の弟子である渡辺藤兵衛が、その地に師の墓を建てたようである。

つい先ごろ、京都にある吉田光由の会のメンバー久下さんたちが、二尊院の角倉の墓の一つに大分の墓とそっくりなものを見つけた。その墓を吉田光由の墓としているところが、二尊院の過去帳に顕機圓哲居士が記載されているという。

面白くなってきた。

自由執筆

アイデア開発

三戸岡 道夫

最近ドラッカーの本がよく売れているという。それは「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーのマネジメントを読んだら」という本が爆発的に売れ、この本の名前が略されて「もしドラ」ブームが起こり、ドラッカーの本がビジネスマンだけでなく、多くの人々に読まれるようになったからである。動機はどうであれ、いい本が広く読まれることは、いいことである。ドラッカーは経営について多くのことを教えているが、その中に、

（アイデア開発については、歴史からの教訓に学べ）

という教えがある。歴史をシャープな問題意識で学べば、無限に近い、ヒント、類似、きっかけが発見できるといっているのである。

ということは、社会のいろいろな出来事や動きについての、発明の殆んどは、これまでのも（すなわち歴史上あったこと）の、新しい組み合わせであることが多いか

らである。発明・発見といっても「○△」が「△○」になったり、「○×△」が「×○△」になるだけ、すなわち組み合わせを変えるだけで、新しいものが出来るということである。

もちろん発明・発見のすべてがそうであるわけではないが、このドラッカーの教えは貴重である。○△×の大きい分野が歴史の中にはあるわけで、そうした意味からドラッカーは、

（アイデア開発は歴史に学べ）

と言っているのである。歴史は有力なアイデア開発の倉庫なのである。「歴史は過ぎたことだ、歴史なんて古い、歴史を振り返るよりも未来を見ろ」、などと説く軽薄な学者（こういう学者を似非学者という）への頂門の一針である。

これと同じような趣旨のことを言っている人間に、新藤兼人という映画監督がいる。「原爆の子」などの映画を作った戦後映画界の気鋭の士であり、すでに百歳に近い年齢になっているが、いまだに映画を作りつづけている稀有な存在である。その新藤兼人がまだ若い頃に、

「人生には絶対越えられないものがある。

それは年齢である」

と言っているのを聞いて、驚いたことがある。若い新進監督なのだから、「年齢など関係ない。ただ年を重ねただけのものに何の価値がある」と言うのかと思っていたのに、新藤兼人は、

「いくら天才でも四十歳の人間には、七十歳のことはわからない。七十歳になった人間のことには、七十歳になってみなければわからない。わかつたつもりでも、それは本当にわかつたのではない」

と言うのであった。だから若い俊英の監督が、七十歳の老人の物語を映画にしても、本当に人間を描いた作品にはならないということである。新藤兼人のいうこの年齢が、ドラッカーの言う歴史であろう。四十歳には四十歳の○△×が、七十歳には七十歳の○△×が、百歳には百歳の○△×があるわけである。歴史は、ドラッカーの○△×の宝庫なのである。

したがって歴史は、たんに過去のことをただ調べたり、知ったりするだけでは意味がないのであって、歴史の○△×を縦横に使いまくって、未来のアイデアを開発してこそ、本当の歴史なのではあるまいか。

自由執筆

練習艦隊余話

瀧澤 中

平成十二年のこと。

海上自衛隊の練習艦「かしま」に、英国のクイーン・エリザベス2号が衝突。幸い、重大事故には至らなかった。

謝罪に訪れたクイーン・エリザベス2号船長に、海上自衛隊「かしま」の艦長は、「幸い損傷も軽かったし、別段気にしていません。それよりも『女王陛下』にキスされて光栄に思っております」

粹な対応に、英国では大新聞などマスコミが取り上げて話題になった。

練習艦隊は、海上自衛隊の幹部候補生

(実際には士官に任官されて乗艦)が、およそ四カ月強をかけて世界を巡り、操艦や艦隊運動、射撃、天測などの実習と、海外親善の目的を果たすために行われるものだが、その歴史は大変古い。最初に海外派遣の練習航海が行われたのは西南戦争の二年前、つまり明治八年である。

木造コルベット艦「筑波」で、太平洋を

横断したのである。ちなみにこの時の訓練生の中に、「帝国海軍の父」とも言われる山本権兵衛がいた。

帝国海軍というのは急造の近代海軍で、奇跡的な早さで完成していくが、その一因として練習艦隊がある。

つまり、「無茶」をしてでも人間を鍛え上げ、また鍛えられる方もそれに応えた。

二年前、私も2週間だけ練習艦隊に乗艦して実際の訓練を見たが、すさまじいの一音である。もちろん暴力をふるう訳ではない。朝から夜中まで訓練と勉強の連続で、よくまあもつものだと、感心した。

海上自衛隊は陸海空自衛隊の中で特に、旧軍の伝統を色濃く引き継いでおり、訓練や行事での様式は旧海軍に極めて近い。戦後、運用などを米海軍方式としたので軍服は米海軍にそっくりだが、護衛艦の中には酒が無いのに「酒保」など、旧海軍時代の名称が残っているものも多い。

練習艦隊での訓練内容も、以前秋山兄弟の本を書いた時に調べたら、現代の訓練内容に近いものが多くて驚いた。

ちなみに練習艦隊の歴史に必ず出てくるトピックスは、トルコの遭難艦「エルトゥ

ールル号」の生存者を送り届けた話だが、この時訓練生として乗艦していたのが秋山真之だった。トルコでは当時の日本の親身な対応を小学校の教科書に載せていて、トルコの親日はこういうところから来ているとよく理解できる。

さらに余談を許してもらえれば、イラン・イラク戦争の時、イランから帰国できなかった日本人五〇〇人を、トルコ政府がチャーターしたトルコ航空が戦火の中救い出してくれた(自衛隊は当時の野党の反対と法の壁で派遣できず、日本の航空会社は危険を理由に出航せず)。

「海で助けてもらった恩義を空で返す」と、当時のトルコ首相は言っていた。戦時中に途絶えた練習艦隊は戦後、昭和三十三年に復活し、現在に至る。

旗艦「かしま」は排水量四〇五〇トン、全長一四三メートル。横須賀の「三笠」よりやや長く、やや細身の小さな艦である。だが、そこに宿る熱い海軍魂は、今もその鼓動を世界に響かせている。



自由執筆

再び「総の国」について

平山 善之

N君

以前、私は上総・下総という国名のもと、「総の国」について、語源の話を書いたのをご記憶でしょうか。ある地名研究家が、総の国は「塞がる」のふさである、と書いたのに反論し、植物繊維を束ねたふさで、弥生から律令国家にかけて房総半島が、麻や絹の繊維産業が盛んであったことに起因するということを主張しました。(史遊会通信一五四号)文献にも、齋部廣成が、大同二年(八〇七)に氏族の来歴を明らかにする目的で書いた「古語拾遺」の中で、

「阿波の齋部を分ち東の土に率往きて、麻・穀を殖う。好き麻生ふる所なり。

故、総国と謂ふ。古語に麻を総と謂ふ。今、上総・下総の二国と為す。」

と明記されていたため長く通説でありました。しかし、古語でも麻を総とは言はないというので最近様々な説が出て、「塞」が元だという珍説まで出るようになったので

す。

近年、考古学が進歩し、出土品の研究も進みました。木簡や墨書土器の解読がなされ、従来の説を覆すような発表もされるようになってきました。総の国もその一つです。

藤原京跡から出土した木簡に「上楅国」という文字が判読されました。「楅」は和訓で「ふさ」といい、葡萄や山椒の実などが房状に垂れ下がっている様を表すということですから、そこで「ふさのくに」とは半島が海に突き出た、その形態から来た名前前で、伊豆の国が、半島が海に「出ず」から来たのと同例である、というものです。古代日本史が専門で木簡や墨書土器研究の第一人者である国立歴史民俗博物館の平川南館長がこの説で、昨年十二月、同館で講演があり、私も改めてお説を拝聴しました。

県史にも書かれ、通説化しつつあります。しかし、私は以下の理由で、やはり従来説を採りたいと思うのです。

一、六から八世紀ごろ、房総の地が半島であった。あるという認識は、一般的には無かつた。当時も海上交通は想像以上に盛んであり、半島と認識していた人もいた

ではあるが、それをもって国名とするには一般民衆の常識化していなければならず、地図や、まして人工衛星の無い時代にありえない。伊豆半島くらいなら、住民全体の常識といえなくもない。

二、下総は、古河・結城まで含み、海に突き出た国とするのは無理がある。
三、「楅」の字が書かれているのは、二つの木簡のみで、その他には土器であれ、紙であれ、発見されていない。もし、「楅国」が本来であるとすれば、もっと多くの例があつてしかるべきである。また国名定まって間もない大同頃であれば、廣成もかくも異説を書きはしないのではないか。

四、当時、一般人がどのくらい「楅」の文字の字義を理解していたか疑わしい。果物のふさは「房」であり、私は安房国の国名こそ海に突き出た半島の形からきていると思う。(安は美林接頭語)

五、推測であるが、木に書く時、書き難いので和訓が同じならば画数の少ない文字を使ったのではないか。秀吉の手紙など見ると、そんな字が溢れている。

六、総の国が都へ送る「調」は、麻が断然多く、全国でも抜きん出ている。上総の望陀郡で織った「望陀布」は当時の最高級品として中国へ送られたり、大嘗会の如き重要儀式には指定されて使われた。織維の国というにふさわしい。廣成が「古語に麻を総という」と書いたのは誤りとしても、麻ほどふさふさしている植物はなく、「麻の如く乱れ」というくらいである。

七、長くなりました。春立つとはいえ余寒厳しき折、風邪などひかれぬよう。ではまた。

事務局だより

※本年の講演者・自由執筆者のスケジュールが決まりました。下記をご覧ください。

※会員の活動

三戸岡道夫氏

『りぶる』2月号スペシャルコラム執筆

「法律と道徳の一致」

※会員の退会

藤谷益雄氏

講演者			自由執筆者					
月	氏名	テーマ	氏名			締切	発行月	
1月	中込 勝則	講師未定	瀧澤	平山	三戸岡	1月末	2月	
2月	島津 隆子		小田	村上	隆	2月末	3月	
3月	太田 精一		鯨	柴田	中込	3月末	4月	
4月	高橋 由貴彦		新井	太田	山本	4月末	5月	
5月	三戸岡 道夫		島津	鍋屋	中山	5月末	6月	
6月	千坂 精一		佐藤	高橋	森下	6月末	7月	
7月	講演		千坂	平山	隆	7月末	9月	
8月	休み							
9月	山本 鎮雄		小田	中込	村上	9月末	10月	
10月	村上 邦治		新井	柴田	瀧澤	10月末	11月	
11月	小田 紘一郎		今年感動した3冊の本			11月末	12月	
12月	忘年会		島津	高橋	中山	12月末	1月	
1月	鯨 遊海							
2月	鍋屋 次郎							
3月	隆 恵							

講演者は講演した月の末日までに講演要旨の執筆をお願いします。字数は、本文最長19字178行、自由執筆者の字数は、本文最長19字107行以内。友の会の方々の投稿も歓迎しますので、字数内をお願いします。友の会員の投稿があった場合は、会員の発表は順次繰り下がっていただきます。

23年度幹事

(総括) 鍋屋次郎 (会計) 平山善之 (司会) 森下征一